

日曜大殿説教

「光はあまねく照らす」

平成二十七年八月九日（日）午前九時 ～ 九時 五〇分

天然寺住職 後藤 尚孝

「讃題」

阿弥陀如来の光明は、あまねく十方世界を照らして、念仏の衆生を攝取して捨てたまわず。

一、 天台宗のある僧侶が法然上人に尋ねました。

「浄土門では、十悪や五逆といった重罪を犯すような凡夫であつ

ぜんちしき

ても、善知識の教えを受け、わずか一遍や十遍でも口に念仏を称

またた

むしようぼうにん

えれば、たちまちに浄土往生という利益を得、瞬く間に無生法忍という覚りの境地に達するといいますが、大いに不審に思います。

そもそも、南無阿弥陀仏の六字名号の中にどれほどの功德が込め

そな

られていて、あらゆる修行にも勝る、そうした不思議な靈験を具えているというのでしょうか。

これに対し法然上人がお答えになりました。

ほうぞうぼさつ

「阿弥陀さまがまだ法蔵菩薩として修行されていた時代、すべての衆生に代わって、計り知れないほど永い時間をかけ、万行にも

及ぶ六波羅蜜をはじめ、ありとあらゆる行を修め、その功德を余すところなく六字の名号に込められたのです。

ぜんこん

ですから、あらゆる行、あらゆる善根、過去・現在・未来のすべての仏さまが具えられた功德のうち、六字の名号から漏れ落ちたものはないのです。そこでこうした称名念仏を『極善最上の法』とも名づけるのです。恵心僧都が『修行という原因とその結果としての功德、自らの覚りを目指す働きと他者への利益をもたらす働き、阿弥陀仏自身のうちに体得されたすべての覚りと外に顕現する衆生救済の働きかけ、極楽浄土の莊嚴と阿弥陀仏のお姿、数限りない広大な教え、あらゆる世界に在す過去・現在・未来の諸仏の功德、これらが皆ことごとく六字の中に込められている。それ故、称名念仏の功德は尽きることがない』と解釈されているのも、そうしたことを説いているのです。

阿弥陀さまは『南無阿弥陀仏の名号を称えて極楽に産まれたいと願うものを、菩薩と共に迎えに行き浄土へ導き救おう。この願

おち

が成就しなければ、たとえ衆生と共に地獄に墮ちようとも決して仏とはならない』と本願に誓われ、このような誓願を四十八とおり建てられました。そしてそれらが皆すでに成就し、阿弥陀という名の仏さまとなられてから十劫という永い時を経ています。ですから、救いようもない極悪の罪人であつても、この名号を称え

ぜんこん

ればあらゆる修行、あらゆる善根の功德を得て、阿弥陀さまはその本願通りにお迎えくださるのです。こうしたわけですから、本

本願の不思議な力によってたちまちに浄土に往生が叶い、なおかつ瞬く間に無生法忍という悟りの境地に達することに何の疑いがありました。一遍称えただけでもこの上ない功德がいただけの名号なのですから、一遍や十遍では功德が少ないなどと決して思ってはなりません。

二、 お尋ねします。阿弥陀さまから放たれる救いの光明は、

ひとたび照らしたならば常にその人を照らして消え去ることはない、と言う人がいますがそれは本当でしょうか。

お答えします。それは大きな誤りです。お念仏を称えるからこそ照らしてくださる光なのですから、日々のお念仏を止めてしまつては、阿弥陀さまは何を頼りに照らすことが出来るというのでしょうか。もし、その人の言っていることが本当だとすれば、ただ一遍のお念仏で往生が約束されることとなりますから、わずかその一片のお念仏を称えない人などいるものでしょうか。しかし実際には、往生が叶う人は少なく、かなわない人は多いのです。この現実を誰が疑うのでしょうか。

三、 ある人が法然上人に尋ねました。「阿弥陀さまの救いの光明に

あずかれるのは常平生の時ですか、つねへいぜい臨終の時ですか。いかがでしょう」。

すると上人は次のようにお答えになりました。「常平生の時からです。それは次のようなわけです。往生を願う心に偽りがなく、こんな我が身ですら往生が叶うということを疑わずに阿弥陀さま

まの来迎を待ち望んでいる人は、三心が具わったお念仏を称えている人なのです。三心を備えれば必ず極楽に往生する、ということが『観無量寿経』に説かれています。そうした思いでいる人を、阿弥陀さまは限りない光明を放って照らしてくださるのです。常平生のときに照らし始めて、最後臨終にいたる時まで決してお見捨てにはなりません。ですから、(阿弥陀さまの本願は)お念仏を称えるものをお見捨てにならないご誓約、と言われているのです。

四、ある人が法然上人に尋ねました。「心が澄み渡っている時に称えるお念仏と心が妄念で濁っている時に称えるお念仏とは、その功德の勝劣はいかがでしょう」。

すると上人は次のようにお答えになりました。「どちらのお念仏でも、往生が叶うという功德は等しく、しいて相違はありません」。